

Kanno Kazuhiko / OpenAI o1 2025.3.11

## マタイ福音書 24:-25:の構造 — 逆転の敗北:刑罰が執行される日

- 24:1-3 神殿が崩壊する日（主が来られて、世が終わる）はいつ？どんなしるしがある？
- 時はいつか（患難ののちに）
  - A1. 24:4-8 時はまだ：惑わされるな（偽キリスト、戦争、ききん、地震）
  - A2. 24:9-14 時はまだ：迫害が起こるが最後まで忍耐せよ
  - B1. 24:15-22 時がすぐ：荒らす憎むべき者が聖所の立ったら逃げよ
  - B2. 24:23-35 時がすぐ：だまされるな、人の子が栄光のうちに来る
- 突然来る（その日は思いがけない時に）
  - C1. 24:36-42 突然来る：ノアの日のよう、ひとりを取られ、ひとりが残される
  - C2. 24:43-51 突然来る：主人が思いがけない時に帰って来るように
- 準備していよ（目をさまして忠実に歩む）
  - D1. 25:1-13 準備していよ：五人の知恵のある娘と五人の愚かな娘
  - D2. 25:14-30 準備していよ：良い忠実なしもべと悪い怠惰なしもべ
- 裁かれる（どうしていたかによる）
  - E1. 25:31-40 栄光の座につく：正しい者たちは御国を受け継ぐ
  - E2. 25:41-46 栄光の座につく：不正な者たちは永遠の刑罰を受ける

### OpenAI o1

提示されているマタイ24-25章の区分と配置は、全体の流れを「いつ・どのように主が来られるのか」という問い（24:3）から始めて、「突然の到来」「それゆえの準備」「最後の裁き」という段階を踏むという大枠をうまく押さえていると思います。以下、評価のポイントをいくつか挙げます。

## 1. 大きな構成の流れと反復（A-B-C-D-Eの二つ組）

提示された構成は、A1/A2, B1/B2, C1/C2, D1/D2, E1/E2というペアで並行しながら進行していく形になっています。マタイ24章から25章にかけて語られるテーマを段階的に示しつつ、「時はまだ」「時はすぐ」「突然来る」「準備せよ」「裁かれる」という主題を繰り返している点は、文章全体の大きな流れ（文脈）を可視化しており、説教的・解釈的にも分かりやすい配置といえます。

特に24章の段階（A-B-C）では

- 「いつ終わりが来るのか」「どのような徴があるのか」
- 「時はまだ（＝終わりに至ってはいない）」「時が近い（＝特定の徴がはっきりしたら急を要する）」
- 「しかしその日は誰にもわからず突然来る」

という三つの流れを描き、25章では（D-E）

- 「だから用意を怠るな（油を備える娘たち／タラントを活かすしもべたち）」
- 「最後の裁き（羊と山羊のたとえ）」

へとつながっていきます。ペアに分けて対応を見せることで、内容の繰り返しや対比（たとえば「だまされるな」→「突然来る」→「だから備えよ」→「裁かれる」）がはっきりし、読者にとって理解しやすい構造になっています。

## 2. テキスト上のマーカーとの関連

マタイ24-25章においては、以下のような繰り返しの語句や構造的マーカーが観察されます。

- 「気をつける（見張る）」という命令
- 「その日・その時（ἡμέρα, ὥρα）はわからない」「思いがけない時に来る」
- 「～のようである（ノアの日のよう、主人が帰ってくるよう...）」という比喩の導入
- 「油を準備する娘／忠実なしもべ」というパラボラ（たとえ話）での“備え”への呼びかけ
- 「その後に（τότε）...」「すると...」といった時系列を示す接続詞

これらのキーワードが、提示の構造ではA1/A2、B1/B2、C1/C2...のまとまりごとに何度か登場し、それを基点に読み分けると、同じテーマが繰り返されながら少しずつ「緊迫度が上がる→それゆえ備えよ→やがて来る裁き」という方向へ収束していくことが見えてきます。

提示された区分は、こうした繰り返しの語り口や接続詞の使い方と対応しており、内容・主題の切れ目（「まだ終わりではない」「いよいよ迫る」「誰も知らない」「備え」「裁き」）を整理するのに適切な構造だと思われます。

## 3. 24章と25章の接合部（24:45-51から25:1-13への展開）

24:45-51の「忠実な僕と悪い僕」の例えから、25:1-13「10人の娘」、そして25:14-30「タラントの譬え」へと続く流れは、いずれも「主が留守にしている（または到来するまで時間がある）間にどのように備えるか」というテーマで統一されています。

この三つの比喩は似た構造を持ちつつも、微妙に視点が異なります。

- 24:45-51：主人が突然帰ってきたとき、下僕たちがどれほど誠実に務めを果たしていたか
- 25:1-13：花婿が到着する場面で、油を用意していたかどうか
- 25:14-30：財産を預けられた僕たちがどれほど積極的に働いたか

提示の構造では、24:43-51と25:1-13、25:14-30を「C2 → D1 → D2」として段階的に示しており、突然来る主人と、それに備えている者・いない者の例が繰り返し強調される流れがよく見えます。

これは「その日がいつ来てもよいように整えをせよ」というテーマを繰り返し刻むマタイの文脈上、必然的な並列構造といえます。したがってこの部分の区分の仕方も妥当でしょう。

## 4. 25章「羊と山羊」（25:31-46）の二分割（E1, E2）

最後の審判の場面（25:31-46）は、一つのまとまりの中で二つに対照が生まれる（「右に置かれる羊の側」と「左に置かれる山羊の側」）ため、それをE1/E2として整理するのは自然です。

この段落が全体構造の結論部として明確に締めくくられることで、主イエスの到来が「裁きの日」ということが具体的に示されます。提示では「正しい者たちは御国を受け継ぐ（E1）」「不正な者たちは永遠の刑罰を受ける（E2）」と対比を立てていますが、ここはまさに本テキストのクライマックスとなる重要な

場面であり、「逆転の敗北」「刑罰の執行」というテーマを象徴的に明確化しています。

---

## 5. 総合的評価

---

1. **大枠の流れ:** 24:3の質問「その時と徴」に対し、「まだ」「近い」「突然」「準備」「裁き」の順をしっかりと区分している点で、読者がマタイ24-25章全体を俯瞰しやすい構造となっています。
2. **反復と並行:** A1/A2, B1/B2, ...といったペア構造は、マタイ福音書特有の「繰り返して深める」文体を視覚化し、段階的な緊張感の高まりをよく示していると思われまます。
3. **神学的・説教的にも有効:** 特に24:45以降の譬え話の連続や、25:31-46の最後の審判の場面を「備え→裁き」というクライマックスに向けて整理しているため、説教や学びにおいてもメッセージが明確になります。

したがって、この区分案はマタイ24-25章を「いつ主が来られるのか、どの徴があるのか」といった冒頭の問いから、段階的・反復的に「突然の到来」と「備えるべき姿勢」、「最終的な裁き」へと導く流れをつかむのに適切な構成であると評価できます。

同時に、マタイの文書特徴（反復、譬え話の多用、キーワードの繰り返し）を踏まえている点でも、本文理解にとって有益です。

結論として、この構造分析はテキストの段階的な主題展開をよく捉えており、学術的な視点からも説教・神学的な視点からも十分に活用価値があるといえるでしょう。